

現代村落研究の展開——覚え書——

松本 通晴

一 はじめに

村落社会研究会（宿題委員会）から筆者に要請された研究会の報告課題は括弧つきの「『イエ・ムラ理論』の現代的総括」であった。この場合「イエ・ムラ理論」はいつ、誰によって提示され、何を指しているのか、が筆者にとってそのとき不明確であったし、また、現代的総括のことばによっても何が筆者に期待されているのか、曖昧なままであった。いま考えてみると、こんな状態での依頼と承諾からの出発であった。相互に報告課題の意味することについて反問のしようのない自明の雰囲気があったのかも知れない。

しかし、それには筆者（現事務局担当）の方にも責任があったように思う。去る一九九〇年の十二月、「村落社会研究会事務局から

の呼びかけ」（『研究通信』一九九一年七月、特別号）に応じて研究会会員から寄せられた共通課題名への回答はすでに事務局から提示された一定の方向性の枠内での選択という性格もあり、この方向性の中に共通課題への要請として「『イエ・ムラ』論の意義と問題点に関する現代的総括」という表現が含まれていたためである。これによって、多数の会員はこの選択肢に同意をしたことを受けて、研究会でも予備的に論議しておこうという運びとなった。それはともかく、筆者は「イエ・ムラ理論」の現代的総括の意味するところについてしばらくのあいだ模索しつづけた。

二 一九七〇年の「イエ・ムラ理論」

右の報告課題の内容を豊かにし、そのうえ鮮明にするために、まず、筆者は村研年報（三五冊）と『研究通信』（一号〜一六四号）とを基本資料とすることにした。そこには共通課題名があり、研究会をふくめ大会の共同討論の総括がしるされ、村研の基本方向が見られるからである。

1、しかし、すでに早期（一九六四年）に、「伝統的農村論」の名のもとに「家・同族およびむら（部落）」が含まれたことがあり、当時、同族結合対講組結合説、農村共同体説などとともに、それは「現実の農村の動きを分析理解する用具としてのメスの鋭さを失ってしまっている」として、「新しい農村社会学」*が要請された。

* 柴田精一・神谷慶治編「現代日本の農業と農民」農業総合研究所、一九六四年、八九ページ。

ここでは「イエ・ムラ理論」でなく「伝統的農村論」のことばが

採用されている。

2、『研究通信』を第一号(一九五三年)から捲つてくると、第七〇号(一九七〇年)にいたって安原茂会員の研究会報告「現段階における村落研究の問題」の中で、「イエとムラの理論」のことが登場してくるのを発見する。初めての表現であったように見受けられる。安原はそこにおいて、「戦前の農村社会の理解は、イエとムラの理論としてとらえられてきた。有賀の家連合の理論もこれをイエとムラの理論とみることができるとし、鈴木もまたその研究の中で、日本の現時の農村界を理解するときの基礎的範疇は、イエと自然村であるとしていた」とし、しかし、いまやイエとムラの理論の歴史的限界が問題にされていると見た。このとき、村研の共通課題は「村落社会研究の方法」であった。それ以後、安原はこの共通課題の共同討論を総括した論文(『村落社会研究』第八集所収、一九七二年)の中で、この「イエとムラの理論」の表現を「イエ・ムラ理論」にかえて使用しようと思案している。

3、右の共通課題「村落社会研究の方法」の報告者の一人、安孫子麟会員は、この「イエ・ムラ理論」を真正面からとりあげた*。その中で、「イエ・ムラ理論」の代表者を有賀喜左衛門(その論文「都市社会学の課題」『著作集』Ⅷ所収)にもとめ、その意味するところを「家が家連合の性格を強く規定し、家連合が村落社会の性格を強く規定する」という視点として理解したうえで、「イエ・ムラ理論」の歴史的段階規定および日本的特質傾向把握の曖昧さを指摘した。しかし他方では、全社会機構のなかにあって「狭い意味での村落社会研究を脱する観点」が必要であるとされつつ、「イエ・ムラ理論」を発展的に継承することがい

ま必要であるとも主張されている。この発展的継承とは歴史的段階規定を明確にして「新しい基本的社会関係」を特徴づけることである。

*安孫子麟「村落社会研究の課題と方法」『村落社会研究』第七集所収、一九七一年。

この安孫子会員の「イエ・ムラ理論」の総括はさきに安原会員が指摘した鈴木理論を欠くとはいえず、二〇年後の今日においてもよく行届いて基本的であり、かつ有用である。

そこで、筆者には今後二つの研究の展開の方向が考えられる。一つは、安孫子が一九七〇年に行った総括とおなじように、一九九一年においても「イエ・ムラ理論」を総括することである。この二〇年間の農村社会の実態の変動と、その間の理論推移とをふまえて、再度、「イエ・ムラ理論」の有効性について現段階において吟味するのである。二つには、安孫子が「社会学研究者が総力を挙げるべき課題」であるとされた「新しい基本的社会関係」とは何かについてその性格を鮮明にするところみである。筆者は安孫子論文の総括の基本的主張をさらに一步すすめてゆく必要性を感じとりながらも、この報告では後者の展開の方向を選ぶことにした。すなわち、筆者は戦後四〇年間の村落社会研究の成果を継承しながら、今後現代村落の研究をどのように展開しうるのか、との課題をあたえられたことにし、それで、この課題にこたえて次の三つの展開軸を用意することにした。①現代村落の歴史的展開について、②現代日本社会の特質把握について、③農村の比較研究について、である。

三 「イエ・ムラ理論」のその後と、共通課題の論点整理

戦後の村落社会研究において、社会学の側から「イエ・ムラ理論」の名称を提唱することは積極的でなかった。一九七〇年にいたって初めて登場したように思う。それには一九六四年から数カ年にわたる村研の「むらの解体」の厳しい論議を前提としていたためである。しかし、その時期を過ぎて、共通課題名も移行すると、直接的には「イエ・ムラ理論」は『研究通信』誌上から消えていった感がある。再びこのイエ（農家）とムラ（村落）が現われるのは、一九八五年以降の「土地所有・利用」と、一九八八年以降の「農村社会編成」の論議に関連してであった。前者においては土地所有・利用にたいするイエ（農家）とムラ（村落）の役割が、後者においては転換期のイエ（農家）とムラ（村落）の動態が、それぞれ論議されようとしたからである。しかし、組織的な論議にはいたらなかった。そのため今日、再び「イエ・ムラ理論」の総括がもたらされていくのであろう。イエと家族、ムラと村落の概念についてもまだ不整合である。

村落社会研究会がこの農業家族（イエ）と村落（ムラ）とを基本軸にして研究を展開させることは当然のことであるが、同時に、現代村落を今後どのように展開していくのかについての課題も重要なものとして提起されよう。このことについて、戦後の共通課題の論点整理（年報収録）のなかにすでに示唆され有用な観念が提出されている。これらを要約して次に掲げてみよう。

1、一九五四〜六三。「村落研究十年の歩み」後藤和夫執筆、以下同。論点(1)同族結合、(2)村落構造（枠組の拡大）、(3)村落共同体論、(4)外国研究を省略

2、一九六六。「『むら』の解体の論点」島崎稔、中野卓。論点(1)

むらとは、村落とは、(2)むらの解体（農業、村落崩壊の色濃い）、(3)村落の比較のうちに日本農村の検討を今後にすすめていくことの重要性。

3、一九六九。「村落社会変化の推進力」安原茂。論点(1)農民層の規定、(2)村落内部構造変化の分析→構造を支える基底の変化の究明。

4、一九七二。「村落社会研究の方法」安原茂。論点(1)ムラとは何か、(2)日本社会理解へのキーポイントか。

5、一九七四。「村落（農村）と都市」嶋田隆。論点(1)村落を考察の中心にすえた都市との関連、(2)日本社会とは。

6、一九七六。「日本資本主義と家」高山隆三、安原茂。論点(1)戦前期、(2)戦後期（むらの基本的構成要素としての家の変化）。

7、一九七八。「村落生活の変化と現状」蓮見音彦。論点(1)農民生活の破壊、(2)村落生活の主體的再編成。

8、一九八〇〜八二。「農村自治」島崎稔、安原茂、高山隆三、岩本由輝、高橋正郎、岩崎信彦。論点(1)戦前と戦後の農村自治、農村計画、(2)部落と自治、(3)国家政策と自治。

9、一九八五。「農政と村落」高橋正郎、中田実。論点(1)農政の論理（効率化、支配）と村落の論理（主體的組替え）、(2)パラダイムの転換をはかる時期。

10、一九八八。「集団的土地利用」東敏雄、吉沢四郎。論点(1)村落の共通認識がない、(2)集落とは、(3)海外農村との比較研究の必要。

以上のことは二つの方向において整理することを可能とさせる。その一つは時系列的に見て、共通課題およびその論点が一九七〇年

を分岐点にしているということである。すなわち前期では戦前期の継承、村落共同体、むらの解体という村落への視点が中心であり、後期では日本資本主義、都市、農政にたいする農民の生活変化、家の変動、土地、自治などの構図である。第二の方向は研究枠組にかわり、「イエ・ムラ理論」（一九七〇年）の存立根拠の吟味と視野の拡大、すなわち日本資本主義（一九七六）、日本社会の特質（一九七二、七四）、さらには比較研究（一九六六、八八）にかかわらせてパラダイムの転換（一九八五）を志向していることである。

四 現代村落研究の展開(1) — 歴史的展開について —

さきに安孫子大員から「イエ・ムラ理論」の発展的継承のために、村落の新しい基本的社会関係を性格づけるよう社会学者にもとめられていることをしるした。それに応えて、一つの基礎的な作業を提示しよう。

1、現代村落の性格規定 — 歴史的発展との関連 —

いままで社会学の研究史には村落の発展段階を提起し、または示唆したところがいくつかある。そこには新しい基本的社会関係の性格規定が見られるのである。

(1) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』（一九四〇）。鈴木は都市化（すなわち社会的風化）の程度によって日本の村を三分類した。

講中村 — 産業組合村 — 農場村（多角型農業経営農家の集まれる村。単に地域的に相近接する人々の村。来住者多数、社会的流動激化、社会分化、各農家の利害不一致、信仰、娯楽の共同欠如、競争と対立）。

(2) 白井二尚『社会学論集』。「共同社会考」（一九四九） — 「利益社会考」（一九五六）。|| 集合社会。開放性、広大性、異質性、生活の分離、対自性、抽象性、普遍性、変動性、非情性など。

(3) 福武直『日本農村の社会的性格』（一九四九）、「現代日本における村落共同体の存在形態」（一九五〇）。同族結合の村 — 講組結合の村 — 地域社会（単なる地域社会生活にもとづく社会的拘束）。

(4) 蓮見首彦『現代農村の社会理論』（一九七〇）。前近代的村落 — 近代的村落（開放的構成、集落の連帯性の弛緩、ときにその境界の消失、成員は自由な行動、他から生産と生活の保障がない、成功と没落、平等性の喪失、異質的、共有地の喪失、共同体の解体後の村落）。

(5) 長谷川昭彦『地域の社会学』（一九八七）。村落共同体 — 村落競合体 — 村落複合体（高度経済成長以降の農村。個人、農家の異質化、農家の兼業化、異質者の複合体。混住社会、広域の地域社会のなかに含まれる）。

(6) 相川良彦「集落活動の展開と論理」（『研究通信』一四五、一九八六）。集落（利益社会。利害を異にする農家同士の意見調整をする場、他方、地縁により結ばれる基礎集団）。

これらの村落発展段階論は社会学者によってこころみられたもののすべてではない。それらは筆者の知り得た範囲のものにすぎないのである。そしてまた、現代村落は廃村・消滅となり、村落の解消ともなる事例が見られるので、現代村落のすべてに発展段階論が適用されるわけではない。しかし、現代村落は一方に共同

体的なむらの解体の事態を見せながら、他方では歴史的展開として利益社会的性格を実現するものと仮定されている。このことはいっそう厳密に吟味し、機械的適用を避けて実証されなければならぬ。この点に関連して、蓮見音彦氏は著書『苦惱する農村』（一九九〇）のなかで、今日の家や村落を、伝統的な物質的な外枠をのこして内実（内部）が夫婦単位、個人別になって空洞化した状態として理解している。われわれにはより説得力のある主張である。

2、混住化社会・地域社会

現代村落は一面、右の新しい社会関係を内容とするが、同時に一九七〇年を前後して混住化社会ないしは広域の地域社会のなかに包摂されてきている。その事例が多く現われている。

二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編『混住化社会とコミュニティ』（一九八五）はこの問題の先駆的研究である。ここで、「混住化社会とは、従来主として農家のみによって構成されていた農村村落が、非農家が流入してきたことによって変貌を遂げ、新しいタイプの地域社会として性格づけられることを余儀なくされてきた社会である」と規定される。しかし、この定義では、村落と都市の性格規定が十分でない。

蓮見音彦編『地域社会学』（一九九一）は高度経済成長の進行に伴って、都市社会学や農村社会学の研究対象が不明確となり、それに都市・農村内部の社会構造分析も不十分となり、そこから都市と農村の関連のなかに地域社会の成立を見て、さらにそれを現代社会の総体的な構造とも関連づける立場を提示する。

この混住化社会や地域社会への展開は、現代村落を不可避的に

都市と関連づける研究の構図である。しかしこの場合、都市をどのように性格規定するのが今後問われてくるであろう。

五 現代村落研究の展開(2) — 日本社会の特質把握について —
有賀喜左衛門の著作集（I、XI）のなかで、「イエ・ムラ理論」が農村に限定されないで、都市にも拡大し適用されることをもつともよく示したのは、さきに挙げた論文「都市社会学の課題」である。そこにはさらに、民族文化の特質傾向も考えられている。

これとは立場をことにして、中田実、高橋明善、坂井達朗、岩崎信彦編『リーディングス日本の社会学6 農村』（一九八六）も、「農村社会についての基本的認識をもつことは、伝統家族（いえ）についてと同様、わが国社会の理解におお欠くことのできないものである」（中田）と述べている。ここで、中田はその主張の根拠を明確に示していないものの、一九八六年執筆の論文であることに注目しておきたい。なぜなら、蓮見音彦の『地域社会学』（前出）では、「少なくとも高度経済成長期までは農村社会をどのようなものとして位置づけるかということが日本社会の把握にとってきわめて重要なものと考えられることが多かった」（一九九一）とし、改めて高度経済成長期以降の日本社会と都市に対して、「イエ・ムラ理論」の有効性が問われていることを指し示しているからである。

この「イエ・ムラ」、または村落を日本社会の特質把握の観点とすることの有効性をめぐってはすでに共通課題の討論（一九七二、七四）でもとりあげられてきたが、次のいくつかの文献もそれに該当しよう。

(1) 神島二郎『近代日本の精神構造』（一九六一）。近代日本の秩序

の原型としての自然村。都市における擬制村の成立。

(2)宮本常一『民族のふるさと』(一九六五)。都市の中の田舎(ふるさと)の設。

(3)高橋勇悦『都市化の社会心理—日本人の故郷喪失』(一九七四)。都会人とその故郷。

(4)松本通晴『都市の同郷団体の性格』(『京都市政調査会報』六八、一九八七)。都市のなかのむらの状況。

また、「イエ・ムラ」とは別に、過疎地域の高齢者、農村環境破壊の観点からも、現代日本の社会問題に接近することができる。

さらに、光吉利之、松本通晴、正岡寛司編『リーディングス日本の社会学3 伝統家族』(一九八六)も、「伝統家族論は現代家族論に対してはもちろんのこと、日本社会構造論に対しても、『日本的なもの』を把握するために有効な視点を提供してきた」(光吉)という。この論文も一九八六年執筆のものであった。そして次の文献も参考になろう。

(5)川島武宜『日本社会の家族的構成』(一九四八)。「家族制度の生活原理は家族の内部にだけでなく、その外部においても、自らを反射する。」「家族外の世界においても人は多くの結合関係をつくる。ここでの結合をつくる人間は家族的結合しか知らぬ人間である。かれらは家族的にしか人の結合関係を意識することができない。日本の社会は家族および家族的結合から成っている。」

(6)R・P・ドーア『都市の日本人』(一九五八)。日本では、家族外の社会集団の構造を家族の型に擬する習慣があつて、それは他国の社会ではめつたにないような一貫性をもって発達してきた。

(7)中野卓『商家同族団の研究』(一九六四)。商家の家連合(暖簾内)。
(8)松本通晴『京都「老舗」研究』(同志社大学人文学科研究所『社会科学』二三、一九七七)。商工家の家連合。

(9)森岡清美『真宗教団と「家」制度』(一九六二)。

(10)間宏『日本労務管理史研究』(一九六四)。経営家族主義。

(11)福島正夫『日本資本主義と「家」制度』(一九六七)。財閥の家。

(12)安岡重明『財閥形成史の研究』(一九七〇)。財閥の家(三井家)。

(13)他方、家概念の適用困難な事例として、妻訪い、別居隠居、末子相続、双系親族などの多様な庶民家族の文化をあげることができる。

以上のようにして、日本社会の諸領域に見られるイエとムラの特質傾向を明らかにしてきたが、それによって次の諸点を指摘することができると思う。

まず、上記の諸研究は主要には一九七〇年以前の著作でなかったか。七〇年以降では「日本的集団主義」の論議のばあいをのぞいて、「イエ・ムラ理論」が登場することが少なく、後退したように見受けられる。しかし、『伝統家族』(光吉)と『農村』(中田)の編者はいずれも、一九八六年の著作において、なお日本社会の理解にとつてイエとムラは重要であると主張する。それゆえ、この一九七〇年以降の日本社会の変動について、われわれはいっそうその実態を明らかにすることがもとめられる。すでに多領域に、イエとムラに準拠しない個人の選択、個人的行動が表層において顕在しているからである。

第二に、イエとムラは七〇年以降一組の「イエ・ムラ」の枠組みから分裂し、それぞれは分離して日本社会の基層を特徴づける。そし

てそのばあいの適用範囲も縮小してきたといえるようである。

六 現代村落研究の展開(3)——農村比較研究のために——

農村の比較研究は村研の論議のなかでも要請されてきたが(一九六六、八八)、十分にみられなかった。そして中田実全(前掲書)は「日本村落社会の構造の特殊『民族的性格』の強調から、外国とくに先進資本主義諸国の農村社会学との理論的交流や国際比較の試みは、ほとんどみられなかった。…全体としてはほとんど未開拓の分野である」(一九八六)という。実際、これまでの村研年報三五冊に掲載されている論文数二四八点のうち外国農村を主題としたものはわずかに一点にとどまったことから、この主張は首肯できる。

しかし、ここには個々の研究会会員による比較研究の成果は含まれていない。そのために、改めて年報「研究動向欄」を見るか、それとも今後のいっそうの研究の展開のために、会員による既発表の外国農村研究一覧を『研究通信』に掲載するか、いずれかの方法がのぞまれるのである。そうしたことは国際的役割にも応えることになるだろう。

七 むすび

最後に、安孫子麟会員が一九七〇年に「イエ・ムラ理論」の発展的継承を説いてからちょうど二〇年になる。この間、どのように発展的継承が見られたのだろうか。それとも、「イエ・ムラ理論」からの「パラダイムの転換をはかる時期」(一九八五)の発言はこのことへの回答なのであろうか。

しかし筆者はまず、現代村落研究の展開可能性を覚え書きとしてしるしてみたのである。そこには、イエとムラの変動過程に注目しながらも、他面、イエとムラはなんらかの形で存続しつつ、同時にこの現代村落は新しい社会関係を実現し、広域の地域社会のなかにも包摂される事態を見とって、それにも注目する必要を主張したのである。